HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	60分15回のドイツ語授業例：シラバスおよび授業改善に向けて北海道薬科大学での試み
Author(s)	神, 久聡
Citation	独語独文学科研究年報, 20, 215-231
Issue Date	1993-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25961
Type	departmental bulletin paper
File Information	20_P215-231.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

60分15回のドイツ語授業例－シラバスおよび授業改善に向けて 北海道薬科大学での試み

神　　久　聡

目次

0．はじめに
1．シラバス作成にあたって
(1)授業時間　(2)受講学生のニーズ予想　(3)授業指針・目標
2．シラバス
3．実施授業内容とシラバスとの対応
4．使用語彙
5．授業の工夫・「ニーズ」調査
6．受講者数・同時開講科目の比較・クラス編成
7．学生による「点検評価」
8．終わりに

0．はじめに

「大学改革・カリキュラム改訂」の流れの中で、本学（北海道薬科大学）では、既に平成5年度（1993年）入学生から、教育方針を「一貫した薬剤師養成教育」に絞り、その新カリキュラムが施行されている。旧一般教育科目は大幅に変更になり、「ドイツ語」科目は、同時開講5科目から選ばせる選択教科の一つになった。同時開講選択5科目とは、「ドイツ語」のほか、「英米文学」、「心理学」「歴史学」、「体育実技」の5科目である[1]。いずれも旧必修科目で、本学専任教員担当である。授業時間についても大幅に変更され、基本的に1授業時間は60分と定められ、また授業回数については、1年前期のみ、15回と定められた（体育実技のみ1授業時間を120分とした）[2]。

大幅な教育システム変更と共に「シラバス」作成が導入された。すべての科目について一回毎の授業計画、つまりドイツ語の場合は15回分について、予め学生便覧に掲載し、学生との「契約」として実施を定めたものである。さらに、「シラバス」を含め、授業に対する「点検評価」を、学生側から受けるために、最終授業時に、統一書式のアンケート（後述）を行

うこととなり、前期の最終授業時間帯に実施された。このように本学では教育システム変更と、カリキュラム「改善」とが進められている。

本稿では、60分授業15回という限られたドイツ語授業の「シラバス」について、作成段階、及び実施についての検討と、授業中に行った3回の「アンケート」から、ドイツ語授業に対する受講学生の姿勢・「ニーズ」などを明らかにし、それを通して、教育目標の設定、その他の課題について検討を試み、シラバス改善と授業改善の可能性の糸口を検討したい。

1．シラバス作成にあたって

(1)授業時間

旧カリキュラムでは、週1回90分授業を1年次2年次の2年間継続することができたが、文法をひと通り終えるのに1年半近く、つまり2年次前期途中までの時間を必要としていた。

新カリキュラムの授業時間－60分15回－では、これまでの文法中心の授業を行うことは不可能と判断せざるを得ない。時間が足りないのが一つの決定的な理由である。新カリキュラム60分15回分で終了する授業時間の長さを、旧カリキュラム90分授業の場合と単純比較すると、1年前期だけの期間の比較で、旧カリキュラム時間（90分授業）の3分の2、10回分に過ぎない。さらに、旧カリキュラム2年間合計60回分と比較すると、その6分の1に過ぎない。

このような比較から、これまでのように、ドイツ語を「一言語体系」として理解する授業、即ち、まず文法に時間をかけ、その展開として種々のテキストや作品を利用してドイツ語力を培うような授業、一種の完結性のある授業は困難と考えざるを得ない。しかしその一方で、ドイツ語を学習し習得する上で、文法は必要である、という意識を捨てることもできない。「文法」を織り込むか否か、あるいはその折り合いをどうするか、かなり矛盾を抱えたままでのスタートとなった。

(2)受講生のニーズ予想

外国語に対する受講生の意識はどうだろうか。何よりも学習者がどのような意識、ニーズを持って受講しているのかということについて、担当者は一応理解しておくことは必要なことと思われる。本来シラバス作成に当たっては、そのことを意識し、理想的には十分理解をした上で、担当者の授業指針なり個々の授業目標を提示するべきではあるが、本稿にあるシラバスは、受講者の意識を勝手に予想し、授業担当者サイドの目標、ニーズを加味して作成、実施したものである。

ドイツ語を選択する本学学生の学習意識・学習希望について次のように予想した。一般に

言われるように、「実際的」、あるいは「役立つ」ドイツ語を求めているのではないかという予想である。

1：役に立つドイツ語、つまり実用的なドイツ語（会話）学習

2：簡単なドイツ語文の理解

3：薬学関係のドイツ語学習

(3)授業指針・目標

また授業担当者として、おおよそ以下の、4～10の各項目について必要なことと判断した。更に外国語学習にあたって、一般的に習得目標とされる基本的な4つの能力(あるいは技能)である「読む」、「書く」、「話す」、「聞く」をいくらかでも学習・習得することを織り込むことを意識した。

4：受講者が興味を持続・拡大できること

5：受講者参加型の授業展開（会話・ペア練習）を行うこと

6：ドイツ語の聴解を心がけること

7：文の基本の理解と学習

8：従来の文法授業は極力避けること

9：学生の意識、希望を把握すること

10：その他

以上の点にそれぞれ対応する具体的な目標、内容、理由付け、授業資料などを示してみたい。

4'：ドイツ紹介。これは、ドイツ語に対して興味を更に強く持たせるために、ドイツの国情、ドイツ事情などに触れることをもくろんだ。そのため各種ビデオ(後述、使用教材参照)を使用する。

5'：会話練習。受講者数は皆目見当がつかなかったが(受講状況については後述)、同時開講5科目からの選択ならば、少人数の授業形態が見込めるのではないかという予測から、受講者に数多く発音練習させるために、唱和形式の練習を極力少なくし、可能な限りペア練習の会話形式を取り入れようと試みた。これによって、ドイツ語発音に対するある種の抵抗感を破ること、また、いくらかでも参加型の授業形態に近づけようという意図がある。むろん必ずしもこの形態だけが参加型授業と言う意図はないが、受講者により積極性を要求することは確かであろう。

6'：ネイティブスピーカーの発音を聞く（聞き取る）訓練は必須である。学習者が理解で

きる場面での、簡単な文、簡単な語句の聞き取り練習をする。実際にはネイティブスピーカーを頼む事が不可能なので、教材にビデオを使用し、聞き取り（聴解）練習を行う。

7'：基本語と文の基本、文型、動詞変化を覚える事。書き込みプリントの配布や、テスト形式の書取を行い、基本を意識させるとともに、「刷り込む」努力を求める。

わずか15回限りの受講回数ではあっても、次の段階への橋渡しをしておくことは必要なことであろう、という認識から、ドイツ語の特徴の一部をなす、「性」、「格」、「文型（構造）」などに一応　触れておくことにした。しかし、学生が名詞の「性」「格」に慣れるまでには、経験上かなりの時間を要するので、覚え込むことまでは要求できない。また一方、副文構造まで進むことは困難との判断から、構文については、単文で扱える次の範囲にとどめた。定動詞２位、疑問文、分離動詞、助動詞構文（話法助動詞、完了）などである。（実際には受動構文は扱えなかった。）

8'：7'と関連するが、従来型の文法中心授業を避けることは時間的な制約からやむを得ないと判断した。より「実際的な場面」のドイツ語を通して学習する方が、興味を失わずに済むのではないかという判断も入っている。「実際的場面」は、適宜取捨選択することになる。一方文法学習の役割は、「実際的場面」に発展的に利用するための基本として、また、言語の体系的な把握の為にも軽視できないのは当然である。しかし矛盾ではあるが、時間の問題から、「文法」を大半割愛しなければならない。

9'：選択して受講するのであるから、なにがしかの動機はあるだろうと予測できる。しかしその内容と、いわゆるニーズは調査してみなければ不明である。そこで受講学生に３回のアンケート調査を行い、把握に努めることにした。

１回目調査では、ドイツ語授業に対する希望、ニーズ調査を行った。２回目調査では、より具体的に、覚えたいドイツ語表現、理解したい事項の調査を行い、さらに、３回目調査では、授業形式、ペア会話練習について、また今後のドイツ語学習の意欲などについて調査した。

10'：コミュニケーション場面に現れるドイツ人のしぐさなどを認識し、異文化の一端に触れる。教材にビデオ「ドイツ人のノンバーバルコミュニケーション」杉谷編（関西大学）を利用することにした。

２．シラバス

各科目の「授業計画（シラバス）」は「授業のねらい」、「使用テキスト及び参考書」などと共に学生便覧に掲載され学生に周知される。「授業のねらい」では、「英語以外の外国語を学ぶことは国際化時代に」「更に広い国際理解と人間理解の技術を身につけるという積極的な意

味」をかかげ、「基礎学習」のほか、「異文化とのコミュニケーション」を考えつつ、「ドイツの科学・文化に関心を広げるワンステップを築く」ことを、「ねらい」として示した。

以下の表が今回（平成5年度分）のドイツ語授業計画（シラバス）である。

授業計画

← 学生便覧記載分 →			← 具体的な実施内容等 →
区分	項　目	授業内容	テーマ ・ 使用教材 ・ 文法など
1	概　説	ドイツとは？ ドイツ語の文字と発音	アンケート(1) ロマンチック街道(VTR)、ドイツの歴史、地名人名 Umlaut、ja/nein、挨拶（会う、別れる）
2	ドイツ紹介(1) 会話(1)	東西ベルリン 簡単な挨拶(1)Danke/Bitte	ベルリンの壁(VTR)、初対面の会話 名前紹介、疑問文、ペア練習
3	ドイツ紹介(2) 会話(2)	街と歴史 簡単な挨拶(2)	ロマンチック街道(VTR)、初対面の会話 疑問文、ペア練習
4	ドイツ紹介(3) 会話(3)	ドイツの学校 自己紹介(1)	ベルリンのギムナジウム(VTR)、自己紹介に必要な表現 名詞、書き込みプリント、ペア練習
5	ドイツ紹介(4) 会話(4)	グリム童話 自己紹介(2)	アンケート(2)、相手を知る表現 疑問文、書き込みプリント、ペア練習
6	視線としぐさ 会話(5)	コミュニケーションの重要な一側面 いろいろな疑問文(1)	ノンバーバルコミュニケーション(VTR)、相手を知る表現 疑問文、動詞変化、人称代名詞、ペア練習
7	ドイツ語文の理解(1) 会話(7)	辞書のひきかた(1) いろいろな疑問文(2)	辞書の見方、性、数、動詞変化、人称代名詞 疑問文、書き込みプリント、ペア練習
8	ドイツ語文の理解(2) 会話(8)	辞書のひきかた(2) いろいろな疑問文(3)	辞書の見方、性、数、動詞変いろいろな疑問文(2)化、人称代名詞、書き込みプリント、ペア練習
9	初歩の文法(1) 会話(8)	名詞、動詞、文の構造(1) 時制と表現(1)	Lindenbaum(VTR)、分離動詞、möchte 書き込みプリント、ペア練習
10	初歩の文法(2) 会話(9)	名詞、動詞、文の構造(2) 時制と表現(2)	Bier(VTR) 動詞の位置、完了形、ペア練習
11	初歩の文法(3) 会話(10)	数詞(1) 重要な助動詞と表現(1)	Verkehrszeichen(VTR) 基数、許可・禁止 dürfen,möchte　ペア練習
12	初歩の文法(4) 会話(11)	数詞(2) 重要な助動詞と表現(2)	基数（ビンゴゲーム） 話法助動詞 können,müssen　ペア練習
13	交響曲第9合唱(1) ヒアリングと発音(1)	歌詞と発音(1)	歌詞（一部）／CD 歌詞の理解
14	交響曲第9合唱(2) ヒアリングと発音(2)	歌詞と発音(2)	単語、構文復習 不定詞句の理解、書き込みプリント
15	次のステップへ	初歩の文法のまとめ	アンケート(3)、テスト（筆記）

前頁の表中、「区分（授業回）」「項目」「授業内容」までが便覧の記載事項である。同じ表の右寄り、「テーマ、使用教材・その他」の欄に、使用教材、及び、実施した具体内容などを提示した。

また教材として以下のものを使用した。

テキスト；「春のドイツ語」小塩、朝日出版

ビデオ；「喜びと自由への賛歌」ポリドール、「ロマンチック街道」NHK、「ドイツ語会話」NHK

「ＺＤＦニュース」「統一ドイツの首都ベルリン」同学社、「世界不思議発見・ドイツ関連」

「ドイツ人のノンバーバルコミュニケーション」杉谷、関西大学

その他；Kursbuch、ポスター、パンフレット、ビザ申請書類、ビンゴゲーム、書き込みプリント等

３．実施授業内容とシラバスデザイン

ここで、今回の授業の組立方を、主にシラバスデザインの面から検討する。実施内容は表から読み取れるように、ドイツ語学習と、情報提供（Landeskunde）の部分とに大別できるが、ここでは「ドイツ語学習」を中心に検討する。

ドイツ語学習では、場面・テーマに必要なドイツ語表現、そのための会話形式練習、及び、それを支える文法の理解が骨格となっている。想定される会話の練習用に自前のプリント教材を準備した。また文法説明を導入時期に極力避けたのは、時間的な問題の外に、文法先行に対する学習者の抵抗感を減らしたいという意図がある。特に導入時期には一定の役割を果たせるのではないかと考えられる。

さてシラバスは「学習者に教えるべき学習項目の明細な記述と、それを一定の順序で配列したもののこと」（川上）[3]ととらえると、前掲のシラバスはその内容について「一定の順序」の配列にやや不統一の面があった。表中、区分（授業回を示す）の６までは、項目が「ドイツ紹介」のテーマで統一されているが、区分７以降は「文法・文型」に基づく構成に変わっている。

ここで、主なシラバスを確認の意味でまとめておく（「川上」から引用）。

「構造シラバス」：文法項目・文型・語彙に基づくもの

「機能シラバス」：言語の使用意図・表現意図に焦点を当て、それによって構成されたシラバス

「場面シラバス」：学習者が遭遇すると予想される場面で使用される表現を中心にすえたシラ

バス

「話題シラバス」：よく取り扱われる話題を中心に構成したシラバス

「技能シラバス」：読む、聞く、話す、聞く、の4技能のそれぞれ下位技能を学習目標として設定、例えば、読む下位技能として、要約する、推測する等の学習項目をあげ、内容を構成したもの

「タスクシラバス」：シラバスの内用をコミュニケーションを通して達成される課題、という形で表したもの。例えば、ハイキングの計画を立て実施するなど。

「非言語教育的シラバス」：ドイツ事情など、ドイツ語圏の歴史・文化・社会についての理解など。

初歩レベルでは、「構造」「機能」「場面」の各シラバスが有効である。

授業では、実際にはいくつものシラバスが互いに組み合わされ、教授法と相まって総合的にドイツ語学習に貢献すべきことは言うまでもない。

今回実施した授業内容ををシラバスデザイン面から見ると、導入部分では「機能シラバス」「場面シラバス」が中心で、「構造シラバス」が付随的な位置にあると言える。中盤からは対象的に、「構造シラバス」を中心にしている。学生のニーズを「会話」ととらえるなら、あくまでも「会話場面」を一貫して盛り込んだ方が、統一性がある。文法は重要ではあるが、シラバスには補足的に配列し、つまり、文法を裏に織り込んだ、授業展開が一つの方法であろう。

「構造シラバス」「機能シラバス」「場面シラバス」の見地から、今回実施した項目を整理すると次のようにまとめられる。（　）内は便覧掲載以外の項目である。なお、項目によっては「機能シラバス」と「場面シラバス」と重なる場合がある。Landeskunde に関わるものは除いている。

「場面シラバス」関連項目　　挨拶。自己紹介。（その他：買い物。レストラン。対話）

「機能シラバス」関連項目　　会話。挨拶・自己紹介表現。言語外表現
（その他：希望・禁止・可能・義務表現。相手を知る。行動の伝達。相手の行動を尋ねる。過去の表現）

「構造シラバス」関連項目　　疑問文。名詞。動詞。助動詞。文の構造。
（その他：疑問詞。動詞人称変化。（人称）代名詞。性。冠詞。不定詞句。分離動詞。完了文）

「構造シラバス」の面で、項目数が極めて少ない。文法を取り込んだ初学者用テキストに

は、文法関連項目は、名詞・動詞から始まり、接続法まで、数にして30程度は挙げられようが、今回の実施計画では、前述の諸条件から大半の項目を削らなければならなかった。構造シラバスはしかし言語の学習到達分野及びレベルを示すものでもあるので、受講者に対して、授業で意図している到達レベルを明示することも必要と考えられる。以上、授業の組立、展開をシラバスデザインの面から検討を加えた。

4．使用語彙

語彙の扱いは、抵抗感をできるだけ持たずに、いかに合理的に初歩のドイツ語に慣れることができるか、という観点から、数を絞り込んだ。一方で、会話練習用プリント以外に、書き込みプリントを用意し、学習語彙を確認させることに努めた。

授業では、固有名詞を除き、以下の語を使用した。名詞については、例えば、飲物など、関連グループ毎にまとめてある。他はアルファベット順である。動詞については、その過去分詞を練習に用いたものについて過去分詞形もあわせて示した。

動詞	arbeiten, bitte(n), entschuldigen, essen/gegessen, fahren, gehen/gegangen, haben, heißen, helfen, kaufen/gekauft, kommen/gekommen, lernen, lesen, machen, nehmen, putzen, rauchen, sagen, schwimmen, sein, senden, spielen, sprechen, trinken/getrunken, verzeihen, verbieten/verboten, waschen, wechseln, wissen, wohnen, zahlen
助動詞	möchte, dürfen, können, müssen, wollen
分離動詞	abfahren, ankommen, aufmachen, ausgehen, hineinkommen, zumachen
名詞	Tag, Morgen, Abend, Nacht, Freund, Freundin, Schüler, Schülerin, Student, Studentin, Bier, Cola, Kaffee, Milch, Suppe, Tee, Wasser, Wein, Auto, Bahn, Bus, Motorat, Taxi, Wagen, Zeit, Zug, Bruder, Großmutter, Großvater, Kind, Kusine, Neffe, Nichte, Onkel, Schwester, Sohn, Tante, Tochter, Vetter, Ober, Fräulein, Bank, Buch, Geld, Paket, Maschine, Tasche, Tisch, Stadt, Einbahnstraße, Mauer, Stadtplan, Straße, Fenster, Haus, Klassenzimmer, Tür, Hunger, Durst, Schmerzen, Verspätung, Tennis
代名詞・人称代名詞	Sie, ich, er, sie, es, wir

形容詞・副詞	alt, bißchen, dick, fleißig, gern, groß, gut, häßlich, hier, jung, klein, lange, lauter, schön, schlank, zusammen
疑問詞	wann, warum, was, wer, wie, wieviel, wo, woher
冠詞類	der(dem, den), die(der, die), das(dem, das), ein, eine, jeder, mein, unser
前置詞	aus, in, nach, gegen, um, zu(zur, zum)
不変化詞	denn, ja, nein, doch, nicht, und, aber
数詞	0～100

以上が授業で使用した単語である。動詞・助動詞・分離動詞の語彙数は42、名詞は62である。語彙数、種類が適切だったかどうかの検討は大切なことではあるが、今後の検討課題としたい。

5．授業の工夫・「ニーズ」調査

授業には様々な工夫が考えられるが、本学で試みたいくつかの工夫などを例示したい。

(1)工夫

60分15回で終了する授業期間で、ドイツ語理解を助ける文法を体系的に一通り終えるという事自体、極めて困難である。しかしこのような事情があるにせよ、授業に対する教員の積極的な姿勢は求められようし、同時に受講生の授業に対する期待、ニーズに応える努力をすべきであることは言うまでもない。前述のように、受講学生の期待を、会話練習中心の学習と予測した。これは、当然、発音、発話、対話練習と結びつくのであるが、ここに活路を求めた。

会話練習はパターン・反復練習を伴う。やや強制的にペアを作らせ、練習を行わせた。一回の練習に、いくつものパターンや複数の動詞を含めるのは、無理があるので、一回毎の、対話練習、つまり短い質問・回答をやりとりする練習を２、３度繰り返すことで切り上げ、次のパターン練習に移らせた。積極的にペア練習するグループがあった一方で、最後まで積極的な参加をしなかったグループも見受けられ、指導に若干の難しさが残った。しかし、既に高等学校までの英語授業で、このようなペア練習を経験している学生は、アンケートの結果半数以上おり、練習としても受け入れられていることがわかったので(後述)、ペア練習は、工夫の上、更に積極的に進めても良さそうである。

会話練習の成否は、教室内の疑似会話場面が受容できるかどうかにも関わってくる。また、

受講生の「演技力」に頼る面もあり、活性化できなかった場面もあった。レストラン場面がその一例である。

ドイツ語を定着させること、つまりいわゆる「刷り込ませる」ためには、筆記に頼る部分がある。学習のまとめという意味でも、学習者には必要なことであり、このために、部分的な書き込み形式のプリントを準備し、授業の最後に数分間であるが、それを「読み上げ書取テスト」として実施した。受講者には若干の負担をかけることではあるが、授業時間最後に、当日学習分の確認をすることは、次回の授業にもつながることになるので、積極的に進めた。必ずしも毎回行えたわけではないが、各自の理解点検と、緊張感の持続という意味で担当者及び受講者の双方に効果があったと思われる。

なお、上記の授業形態では、予定のテキストについて、Landeskunde と文法のまとめ以外、十分に活用できなかった。

ビデオの活用は有効である。少なくとも、使用したビデオ教材は好評だった。ドイツの歴史のみならず、各種の情報を積極的に与えることによって、理解、興味を広げるのに大いに貢献できる。ただし、特にドイツ語音声の場合、数分以内で切り上げられるように編集の必要があり、日本語のバックアップの必要性を感じた。聴解の練習として利用したビデオ（ドイツ語会話・NHK）は、発話スピードが比較的遅く、初学者にはプリントを準備するなどの補助をすることによって、その効果を十分に期待できる。

ビンゴゲームは殊の外活気があった。ゲーテ・インスティテュートから譲られた各種ポスター、旅行パンフレットなどを多数景品としたので、楽しみがあったからであろうか。数詞（基数）の練習時間に行ったのであるが、発音を含め、取り組み方は活発だった。

(2)「ニーズ」調査

さて授業に対する学生のニーズ・希望調査をするために、3回のアンケート調査を行った。調査対象は44名（3回目は43名）いずれも無記名回答である。アンケート項目の概要は次の通りである。

1回目アンケート（初回の授業時）「ドイツ語授業に何を求めるか・期待するか」

2回目アンケート（5回目授業時）「知っておきたいドイツ語表現」

3回目アンケート（最終回授業時）「ドイツ語に対する興味・広がり」

1回目アンケートの質問とその結果は以下の通りである。

質問　　ドイツ語授業に、何を希望していますか、箇条書きでかまいません。

できるだけ、具体的に書いて下さい。

回答（項目をたてて整理した。）

1：会話　日常会話　25
　　挨拶　13
　　旅行　5
　　自己紹介　3
　　ドイツに行きたい　3
　その他　電話、買い物、道を尋ねる、バス・列車に乗る、レストランに入る

2：ドイツの国について；ドイツについての情報・知識
　　文化・人　5
　　音楽・芸術　5
　　風習・礼儀・食べ物　5

3：単語の意味(日常使用の重要単語) 9

4：基本文法・発音　6

5：簡単な文章理解(ポスター・看板) 6

6：医学・薬学・薬品用語、文　4

7：簡単な本　4

8：文献理解の一助　2

9：その他　ドイツの小学生用教科書が読める。地名。歌。詩。聞く。手紙の書き方。必修並みに、どんどん進めて。文法は遠慮してほしい。ドイツ人の感性での文法。

以上の結果を見ると、「日常会話」を中心に学びたいという希望が圧倒的に多い。これは予測通りではあるが、簡単に実行できることではない。実際には「日常会話」の範囲を受講者がどう把握するのか、担当者との共通認識が必要であり、また、「日常会話」を構成する言語の構造を理解するために、学習者に「文法」を意識してもらわざるを得ない。担当者の大いに悩むところであるが、とにかく受講生は、それなりの期待を持って選択した以上、その希望にどれだけ応えられるのか、今度は教師サイドの問題となってくる。あらためて、「場面シラバス」・「機能シラバス」などのシラバスデザインに工夫を必要とし、さらにこれらをこなす教授法の必要性とが絡まってこよう。

2回目アンケート調査は3分の1の授業期間を終えたところで実施した。授業では「自己紹介」を終えた時点である。ここでは、覚えたい具体的なドイツ語表現を調査してみた。な

お回答はグループ分けしてまとめた。また数字は項目毎の回答延べ数で、数字がないものは１名の回答である。

質問　「知っておきたい・覚えたいドイツ語表現」を書いて下さい。
回答

1．各種疑問文
　場所（駅、病院など）や道の尋ね方：15、いくらですか：10、　時間を尋ねる：５、聞き直す：３、使用法を聞く
2．感謝・謝罪：14
3．挨拶：14（初対面・出会い・具合を尋ねる・別れ・電話で）
4．依頼・命令：13（これを(見せて)下さい、待って、貸して、助けて、写真を撮って）
5．曜日、月日、時間、誕生日：11
6．体調・感情・感覚表現：８（空腹、眠い、疲れた、飽きた、困った、信じられない、きれい、等）
7．食事の際の表現：８（乾杯、食事の開始・終了、味）
8．家族関係を示す単語：４
9．人を誘う：３
10．自己紹介：２
11．手紙の書き方：２
12．その他：数字、色、呼びかけ、激励、タクシーを頼む、諺、冗談、歌、英文法との違い

この結果から、受講者の多くは、例えば旅行する際に想定できる、具体的な場面での表現の学習を希望していると判断できよう。もちろんすべてを授業で扱う事は困難であるが、使用語彙などを絞り込むことなどに参考になろう。

３回目のアンケート調査では、ペア練習方法（パートナー練習）について、また、授業開始時と比べてドイツ語に対する興味が更に強くなったかどうか、更に今後のドイツ語学習の希望について調査した。

質問　パートナー練習について
　(ア)英語などで以前にしたことがありますか ―――――― ある　24：ない　19
　(イ)パートナー練習はあなたにとって ―――――― 良い　42：苦痛　1

質問　ドイツ語に対して更に興味を持つことができましたか？　　はい　33：いいえ10
質問　この先、ドイツ語を更に学習・習得したいと思いますか？　はい　19：いいえ24

その他、要望・気付いた事柄が寄せられ、次のように分類した。
評価された事項：　　会話練習、ビデオ、ビンゴゲーム（数詞）
否定的な事項　：　　後半になって文法を詰め込まれた
希望　：もっと会話練習をしたかった。ビデオをもっと見たかった。文法を初めからゆっくりして欲しい。進路を速く、系統的に進めて欲しかった。単語に発音記号かカナルビをつけて欲しい。

ドイツ語に対する関心と今後の学習意志との関係は、上の結果からは一致しない。ドイツ語あるいはドイツに関連する事柄に関心は広がったが、半数を超える受講生は、更にドイツ語学習を続ける意志を持たなかった。ドイツ語学習の動機が必ずしも膨らまずに終わった原因を探ると共に、次のステップへつなげる教授法を考える必要があろう。特に、助動詞、分離動詞、完了文の理解と練習には時間を要するのだが、やや進路が速く、消化できずに終了した感があり、ここに原因の一つがありそうである。目標到達レベルと進路を再検討する必要性がある。

「会話練習」に対する抵抗感は大きくないようであり、今後、会話場面・会話練習に、文型や文法をいかに「効率的に」組み込むかということが、課題の一つと考えられる。

今回行った3回のアンケート調査は、受講者の具体的な希望、姿勢が読み取れたという点では、成果を見た。更に、このようなアンケートを基に、受講者と授業内容や進め方を話し合う事も場合によっては可能と考えられるので、アンケートの活用を考えてみたい。

6．受講者数・同時開講科目の比較・クラス編成

選択科目の受講については、卒業要件分として、同時開講5科目から、1科目（1単位）の選択で十分だが、同一内容で週2回開講なので、最大2科目の選択が可能である（英米文学のみ週一回の開講）。受講届提出までの間、時間的余裕がなく、また選択科目担当者からのガイダンスがないなどの事情のもとで、科目別の受講者数は次のようになった。

％は受講対象者実数(201人)に対する割合（小数2位4捨5入値）である。参考までに科目毎の男女別受講者数と、他科目受講者数を付記した。延べ受講者数は229人、2科目選択した学生は28人(延べ56人)、1科目のみの選択者は、173人だった。この受講分布は、科目によって片寄りがあるが、学生の率直な選択希望結果として受けとめたい。

各科目受講者数	(人)	%／201 (実数比)	男女別受講数 (男)：(女)	他科目 受講者数
ドイツ語	44	21.9%	(9)：(35)	17
英米文学	10	5.0%	(3)：(7)	3
歴史学	17	8.5%	(7)：(10)	5
心理学	77	38.3%	(21)：(56)	17
体育実技	81	40.3%	(51)：(30)	14
計　延べ	229人		(91)：(138)	56人

ドイツ語選択の割合は約2割で、44名、その受講者のうち17名が他の科目も受講した。またクラスは2クラス編成であるが、それぞれ17名、27名で、人数の面ではかなり「理想」に近い人数だった。外国語授業で、発音、会話中心の授業形式を前提とした場合、ペア練習も含め、個々人に対応するのに、少ない人数の授業で行えるならば、それに越した事はない。

7．学生による「点検評価」(資料)

本学では「授業アンケート」を最終授業時間に行い、学生から「点検評価」を受けることになった。カリキュラムを授業計画、実施、点検評価までを含むシステムととらえるならば、これが最終段階である。マークシート方式のアンケートで、事務処理の後、担当教員に、学生からの意見・提案部分が渡される。参考資料として、書式のみ示すことにする。

授業科目名：○○○○　　教科担当者名：△△△△　　学年：□　クラス：□

このアンケートは、授業を改善するための参考資料とするものです。回答は記名式ですが個人の名前が出て不利になるようなことは絶対にありませんから、安心して真面目に率直な意見を表明して下さい

1．上記授業科目について以下の項目が最もあてはまると思う数字を1つだけ選んでマークをぬりつぶして下さい

	全くそうは思わない	そうは思わない	どちらともいえない	そう思う	強くそう思う
問1．説明が明快、ていねいで理解し易い	＝1＝	＝2＝	＝3＝	＝4＝	＝5＝
問2．説明が体系的でまとまりがある					
問3．重点をうまく要約してくれる					
問4．基礎的なところから説明してくれる					

問５．　話し方が明確で聴きとり易い
問６．　テキスト，プリント等の資料が適切で勉学に効果的である
問７．　黒板、ビデオ、スライド、OHP 等の使用が効果的である
問８．　雑談やエピソード的な話が面白くためになる
問９．　講義内容は授業計画（シラバス）に沿っている
問10．　授業の進行が早くも遅くもなく適切である
問11．　授業における学生の理解力の水準をよくわかっている
問12．　授業を静粛に保つ配慮をしてくれる
問13．　授業が興味深く触発されることが多い
問14．　教科担当者は授業のためによく準備をしている
問15．　担当科目を教えることに熱心である
問16．　学生の質問や相談に親切に応じてくれる
問17．　私（学生）は私語を慎み、授業に集中した
問18．　私は授業中、講義内容を理解するよう努力した
問19．　私は教室外でもこの科目の勉学に意欲的に取り組んだ
問20．　この授業は、私にとって将来の役に立つ
２．　上記の授業科目について、他に意見、提案があれば下蘭に書いて下さい。

８．終わりに

本稿では、今期終了した15回のドイツ語授業のシラバスを、実際の授業と照らし合わせながら検討を加え、本学受講生の「ニーズ」調査を基に、ドイツ語授業に対する要望を読みとりながら、今後のシラバス作成と、授業改善の足がかりを考察した。特に、「学生のニーズ調査」は、それ自体、担当者にとって基本的に必要な事と考えているが、単に「調査」に終わらず、結果を利用し、例えば「日常会話」とは何かを問いかけ、考えさせる事によって、学生を授業により積極的に参加させるための一つの手段として利用も可能だと考えられる。このためのより有効な調査法が課題となろう。

さて、アンケート結果から明かであるが、「ドイツ語に対して更に興味を持った」受講生が約77％いた一方、「更にドイツ語の学習を続けたい」という割合は約44％だった。一面では、次のレベルへの架け橋を築くことができなかったとも言えよう。この判断に基づけば、シラバス作成時に意図したことが、あまり効果を上げずに終わったことになる。

反面、本学のように、職能教育に絞った教育システムに衣替えした理系単科大学ではあっ

ても、学生の中に、今後もドイツ語学習を希望する者が少なからず存在するとも解釈できよう。楽観的にとらえるならば、学生の英語以外の外国語に対する基本的学習意欲は、十分に存在するといえよう。受講者が持っている実用的な外国語学習という希望は、単文一つを例に取ってみても、15回授業でその基本を理解させることは困難であるが、一方、授業が開講される限り、担当者の積極的な取り組みを「シラバス」に盛り込む必要性が求められている。本学の様に限られた時間内では、教育目標をドイツ語、あるいはドイツ関連の事柄に対する興味や関心を深め、拡大する事と、初歩的な次のドイツ語学習段階へ興味をつなぐことが肝要と思われる。

外国語教育をとりまく環境が大きく変化している今日、それぞれの条件下で、シラバス作成と共に受講者のニーズと担当教員のニーズの確認は避けられない状況になってきていると思われる。本学のカリキュラム改訂が、必ずしも他の大学に共通するものではないが、シラバス作成等に参考になれば幸いであり、同時に忌憚のない御指摘を受けたいと願っている。

注

1）卒業要件単位は1単位（1科目）である。実際は週2回同一内容で開講され（2クラス編成）希望者は2科目受講できる。なお、英米文学のみ1クラス編成、週1回の授業回数で行われた。

2）旧一般教育関係科目の英語は、「薬学英語」という専門科目（専門科目は必修）に変更、心理学と歴史学は内容変更の上、専門教科の中の一部担当に変わり、保健体育（講義）は「保健科学」に変更になった。また新たに、「国語表現法」「コミュニケーション学」を専門科目として設けた。一方で、人文社会科学系で旧選択科目だった「哲学」「文学」「法学」、及び「経済学」は廃止された。理系旧一般教育系科目は殆んどが、科目名、内容等の変更を加え、専門（基礎）科目となった。

3）川上、朋男、ドイツ語教育のカリキュラム開発(1992)参照。

文　献

大学の教育改革と英語教育〔「英語教育」〕（大修館）1993, Vol. 42, No. 1-8.

川上、朋男：ドイツ語教育のカリキュラム開発〔「ドイツ語教育部会会報」42〕（日本独文学会ドイツ語教育部会）1992. Nr. 42, 32-38頁

（北海道薬科大学助教授）

Ein Deutschunterrichtsplan für 15 Stunden

—Verbesserungsversuch mit Berücksichtigung der Umfragen bei Deutschlernenden—

Hisatoshi JIN

Zusammenfassung

Dieser kleine Aufsatz beinhaltet einige Probleme des im Jahr 1993 durchgeführten Deutschunterrichtsplans(engl.syllabus), einen Bericht über die zugrundegelegten Umfragen bei Deutschlernenden und Anhaltspunkte zur Verbesserung des Unterrichtsplans und des Unterrichts.

An der betreffenden Hochschule sind die Umstände um die Allgemeinbildungsfächer vor allem aber um den Deutschunterricht schwieriger geworden. Nach dem neu gegründeten Lehrplansystem werden nämlich für den Deutschunterricht als Wahlfach 15 Stunden und zwar nur für das erste Semester zugelassen. Eine Unterrichtsstunde dauert 60 Minuten. Das bedeutet eine zeitliche Verminderung bis auf ein Sechstel, verglichen mit früheren Gesamtstunden. Unter dieser streng begrenzten Bedingung wurde der hier vorgestellte Unterrichtsplan entworfen.

Nach der Prüfung des Unterrichtsplans für 15 Stunden und der dreimalige Umfragen über die Wünsche der Studenten gelangt man zu der folgenden Ansicht ; im Vordergrund sollte „Gesprächsübung für den Alltag" stehen, und der Unterrichtsplan dafür durchgehend einheitlich angeordnet werden. Grammatik soll dagegen als ein wichtiges Hilfsmittel angesehen werden.

Es würde vor allem wichtig sein, daß die Wünsche der Deutschlernenden möglichst genau erfaßt werden, damit die Möglichkeit einer Unterrichtsverbesserung gesichert wird. Dazu spielt zweifellos die Umfrage bei den Lernenden eine bedeutende Rolle. Hier an der betreffenden Hochschule sollte anstatt des grammatikorientirten Unterrichts vielmehr eine Erweiterung des Interesses am deutschsprachigen Gebiet und eine Einleitung in die Grundgrammatik vermittelt werden.